「思い出の歌」　　木村　彰彦（教育・昭和５３年卒）

人の感覚というのは不思議なもので、ある香りによって鮮明に過去の記憶がよみがえったり、歌によってその曲を耳にしていた時代のことが昨日のことのように思い出されたりするものです。私が、ほぼ半世紀前となってしまった大学時代に思いをはせるのは、やはり当時流行していた歌を聞いた時です。例えば『赤ちょうちん』。「あの頃 2 人のアパートは裸電球まぶしくて　貨物列車が通ると揺れた」という歌詞を聞くと、当時住んでいた下宿の三畳一間をはっきりと目に浮かべることができます。高徳線の線路が窓の下を通っており、列車が通るたびに部屋は文字通りガタガタと揺れました。トイレと流しは共同で、ガスコンロは 10 円入れると３分間だけ使えるという代物。いかにしてラーメンを効率よく作り上げるか、工夫を重ねたものです。今の大学生には信じられないことでしょうが、風呂などという贅沢なものはあろうはずもなく、銭湯に出かけていました。『神田川』も思い出深い曲ですが、ともに風呂屋に通ったのはうら若き彼女ではなくむくつけき男友達。風情もなにもありません。

『岬めぐり』も忘れられない曲です。メロディとともによみがえるのは、研究室の仲間との研修旅行です。地理学研究室では、毎年夏休みに地理的に特色のある場所を訪れていました。２年生の夏は青森県に向かいました。大阪駅から寝台特急「日本海」に乗り、日本海沿いに北上、途中車窓から八郎潟が見え、その広さに驚きました。能代から五能線に乗り換えて弘前へ。悠々たる山容の津軽富士、鈴なりのリンゴ、残念ながらガスに包まれた岩木山山頂、思い出は数珠つながりとなって浮かびます。下北半島の尻屋崎に向かう途中の景色は特に印象に残っています。岬への道と草原のその先に、空に向かってすっくと立つ白い灯台。山本コータロー氏はきっとこの岬を表現したに違いないと確信したものです。

そして、忘れてならないのは『闘魂込めて』。言わずと知れた読売巨人軍の応援歌ですが、当時我々香大ソフトボール部は、勝手に歌詞を変えて部の応援歌として歌っていました。あまり勉強熱心ではなかった私にとって、部活動は大学生活の核となるものでした。古い木造長屋の部室、暗く汗臭い室内の様子を今でもはっきりと覚えています。今でもソフトボール部は２年に１度ＯＢ会を開催し、現役チームとの親善試合を行っています。そして懇親会の締めはもちろん香大ソフトボール部版『闘魂込めて』。コロナの影響で久しく会が持てていませんが、また懐かしい仲間とともに思い出の歌を高らかに歌いたいものです。

自他ともに認める高齢者となった今、最近の楽曲や歌手には馴染みがなく、何が何やらまるでちんぷんかんぷん。難しい名前のシンガーの、とてつもなく早口の舌を噛みそうな歌を器用に歌いこなす現代の大学生諸君。彼らも将来、その曲たちを懐かしく思い出す日を迎えることでしょう。誰にとっても、長い時を経て当時の歌とともによみがえる日々の一コマ一コマは、輝きを失うことのない大切な宝物です。